

4

1994. 5

薬友会報

千葉大学薬友会



薬学をリードするSTAFF



ペニバナ



ワタ



ジギタリス



薬草園

薬友会会长あいさつ.....	2	サークル情報(野球部).....	17
退官・新任教授あいさつ.....	2・3	教職員の異動.....	17
薬学女性は今.....	4・5	山根先生のご逝去を悼む.....	18
研究室紹介.....	6・7	変わる大学.....	18
クラス通信.....	8-15	薬友会より.....	19
支部だより.....	15	卒業生の進路.....	19
あの道・この道(会員だより).....	16・17	生涯教育セミナーおよび 総会のお知らせ.....	20

薬友会会長あいさつ

山崎幹夫



新しい薬学の医療への貢献

医薬に対する社会的関心がこれほど高まったことがこれまでにあったでしょうか。社会の高齢化、国際化の進展、国民医療費の高騰、医薬品の効力や副作用の先鋭化と、それにともなう適正使用の必要性の増加等の理由の重なりが、社会の厳しい目を医薬ひいてはその主たる担当者であるべき薬学出身者に向けさせているとも思われます。

こうした社会的情勢の変化を受けて、薬学の教育研究も大きく変わろうとしています。そのひとつとして、創薬科学のより一層の充実があげられます。創造性豊かな医薬の創製に役立つ人材が1人でも多く薬学部を巣立っていくことが望れます。そのために、本学部では薬用資源教育研究センターの設置を実現させようとしています。これは、遺伝子操作技術を応用した生物薬用資源の確保と、その成分を先導化合物とする機能性分子の設計までを目的に含めた新しい教育研究組織へのリストラクションです。もうひとつは医療薬学の充実です。より臨床の場に密着した薬剤師業務を視野に入れた薬剤師教育、しかし過度に実際的に、あるいは技術的方法論的内容に終始しないような医療薬学をどのように薬学の教育研究にとり入れていくかは、緊急かつ重要な課題です。そのためには、大学院改組の必要性が考えられています。

社会の批判を浴びるときは、同時に飛躍が期待されるときもあると思います。いまこそ、私たちの目指す新しい薬学への展開が、創薬の場でも、また医療の場でも、素晴らしい新薬の創製や医薬品の適正使用の推進に目覚しい貢献を果たすことができるよう、心を合わせて努力していかなければならないと考えています。

薬友会会員の皆様のより一層のご活躍をお祈りするとともに、更なるご協力を願い申し上げる次第です。

—退官に際して—



薬品合成化学研究室　日野　享

薬学部に製薬化学科が増設され、その新しい講座の一つである薬品合成化学の初代教授として隣りの放医研より移って来たのは昭和43年4月のことであった。当時新しかった2号館3階で活動を開始して1/4世紀たち3月で停年を迎えた。千葉薬100年の歴史の中での25年は決して短い年月ではない。この間に研究室を巣立っていった卒業生、修了生は150名におよんでいる。月日の経つのは早いという月並な実感である。卒業生が各方面で活躍している話がきこえて来るのはうれしいことである。

薬品合成化学や有機化学の講義にはそれなりに努力して当って来たつもりだがどれだけ有効なものだったか反省も多い。確かなことは講義の準備を通じて自分が多くのことを学び成長したことである。

25年振り返ってみればこの間の変化は大きい。当時は思いもしなかった方向に学問も進んでいる。10年先のことを予想する難しさを感じる。一方50年経っても100年たっても変わらないものもある。

25年間暖かく見まもって下さった皆様に感謝する。教養部の改組・消滅という千葉大はじまって以来の変革期を迎えている薬学部のこれから発展を祈り、それに伴う薬友会の活動の盛んになることを期待しています。有難うございました。

—新任教授紹介—



医療薬剤学講座生物薬剤学研究室　堀江　利治

(昭和47年東京大学薬学部卒業、昭和53年東京大学大学院修了)

平成6年1月1日より生物薬剤学研究室を担当することになりました。100年余の長い歴史をもつ伝統ある千葉大学薬学部の一員となり、本学部の教育、研究に貢献できれば幸せであると感じております。生物薬剤学は、薬物の体内動態、すなわち薬物の身体の中での動きを研究対象とした学問分野であり、具体的には薬物の吸収、分布、代謝、排泄の諸過程を研究対象としています。薬物を有効かつ安全にヒトに投与する方法を考えることが生物薬剤学の担う重要な役割の一つです。効率よく薬物を体内に送り込むことによって、その薬理効果を有効に発現させ、同時に薬物による副作用を回避

して薬物治療を安全に行なうことが大切です。そのためには生体の特性をよく理解し、先端的な情報を導入していく必要があります。薬物の生体内移行の諸過程における薬物と生体との相互作用を探りながら研究を進め、有効かつ安全な薬物投与の方法を開発していきたいと考えています。

教育面でも薬学は多くの問題に直面しており、なかでも薬剤師教育の重要性は大きく、責任の重みを感じています。薬学の変革期であるこの時期にあたって、薬学への期待と要求も大きく、難問も多いことは思いますが、広い視野をもち、柔軟な思考力のある薬学生の育成に努力していきたいと考えております。



薬品合成化学研究室 中川 昌子（昭和33年北海道大学医学部薬学科卒業、昭和35年北海道大学大学院修士修了、昭和35年～38年米国メリーランド大学大学院博士課程）

1994年4月1日より薬品合成化学研究室を担当することになりました。薬学を支える三本柱は有機化学、生化学、物理化学と云われています。薬品合成化学は学問的には有機化学の一分野です。有機化学は構造、反応と合成の三大分野に大別されます。現在使用されている医薬品の大半は有機化学の技術を駆使して合成された人工の有機化合物です。現在はまだキラリティのないものやラセミ体として使用されている薬の方が多数ですが、キラルな合成医薬品（光学活性物質）が次第に多くなりつつあります。画期的な医薬品や機能性素材を生み出すためには、一段と精密化された有機合成化学の知識と技術が要望されています。一方、近年分子生物学、分子構造生物学等の進歩によって生体反応や薬の作用発現機構を分子構造レベルで理解しようとする、即ち有機化合物の構造を基盤にして、有機化学反応として理解しようと変貌しつつあります。そこで有機化学の基本的な教育と研究とに連携して、医薬品の作用機構を有機化学の反応として考えることが出来るような教育と研究に従事したいと思っています。合成された化学物の構造を確かめるための分析機器も大分充実してきました。有機化学はまだ多くの解決すべき問題が残されている大きな発展を必要とする分野です。薬学は狭い意味での薬剤師教育だけではなくて、もっと広い基礎的な生命科学の重要な担い手であることに思いを馳せ、また若い優秀な芽を育てるに楽しみを見出しながら努力したいと思っています。



細胞生物学研究室 玉野井 逸朗（昭和28年九州大学理学部生物学科卒業、昭和33年九州大学大学院修了）

この度の大学設置基準の改正にともない、教養部生物学教室より4月1日から薬学部に移籍し、細胞生物学講座を担当することになりました。

生体の構成単位としての細胞に関する研究は、最近ますます重要性を増してきてています。これも分析方法の改善発達と無関係ではなく、なかでも遺伝子工学による細胞の分析と、情報工学の発達による分子レベルの解明がすすみ、これらの成果からまさに「ナノテクノロジー」の時代に入ったといわれる所以です。

このような時代に対応して、1年生の後期に、細胞の形態と機能の観点から、体細胞、生殖細胞、受精、形態形成について講義をする計画を立てています。一方研究の方は、細胞の機能分析、特に細胞と体液との関係、胚発生時期での胚の細胞と母親の細胞との関係、ガン治療のための重粒子照射の効果等に焦点をおき、細胞への薬剤効果の基礎的研究に役立つよう、細胞の「はたらき」を追求してゆきたいと考えています。そのため、放医研のパンデグラーフ加速器を利用して元素の分析を行うなど計画しています。ただ私は、来年の3月いっぱいで停年退官になりますので、ちょうどあと1年間ということになります。幸い学生さんが3名卒業研究できてくれるこになつておらず、一緒に仕事をするのを楽しみにしているところです。充実した1年間になるよう頑張りたいと思っています。



放射性薬品化学研究室 大橋 國男（昭和35年千葉大学文理学部卒業）

法令改正に伴う大学の大綱化に基づく改革によって、千葉大学では本年3月31日をもって教養部が廃止されることになりました。これによって4月1日からの私の所属は薬学部に決まり、新設の放射性薬品化学研究室を担当し関連の講義と研究を行うことになりました。私のこれまでの専門は放射化学であります。今度の移籍は異なった分野からの突然の移行であるため、準備不足の感は否めませんが、放射化学に関する知識及び技術は、近年ライフサイエンスへの応用といって、生物学、生化学、医学、薬学、農学などの諸分野において不可欠のものになっており、また放射性医薬品を利用した核医学診断や治療は私がこれまで興味をもってきた分野であります。第10回放射性薬品化学国際シンポジウムは昨年京都で開かれました。開会の挨拶では、この分野の研究は近年、内容が大きく変化し、また質が著しく向上し、ライフサイエンス研究の新しい一分野を形成する方向に進みつつあると、述べられたそうですが、ここでも新しい時代が近づいてきているように見えます。

幸いにして、平成6年度には放射性がん治療薬の研究及び放射線医学総合研究所の重粒子利用の二つのプロジェクトに参加できることになっておりますので、この辺を足がかりに放射性薬品化学の教育と研究を始めたいと考えています。御支援をお願いします。

From Woman's Point of View



食品中の発がん物質とつき合いはじめてはや18年

国立がんセンター研究所 発がん研究部 長尾 美奈子（昭和34年卒）

1994年の元旦は、ウィーンホルクスオーパーのニューイヤーコンサートとしゃれこんでみた。J. シュトラウスを中心構成されたプログラムである。最後の曲目「皇帝円舞曲」を聴いているうちに、現在計画中の実験がオーケストラと見事融合して期待されるべきオートラジオグラムのパターンが、演奏者の頭上で踊り出した。Scienceを職業としていることの無上の幸福感を味わうことができた。

私が、肉や魚を焼いたときに変異原物質が生ずることを見出したのは今から18年前1976年のことである。加熱調理した魚肉に存在するヘテロサイクリックアミンと呼ばれる一連の化合物の発がん機構を現在も研究している。魚肉の焼け焦げが、どの位ヒト発がんに対し危険性を持つものであるかを追究している。発がん物質のもつDNA変異におけるfingerprintの追究、発がん感受性を制御している遺伝子の探索など、興味ある仕事が山積みされている。研究の目標は、発がんする年令を少しでも遅らせることである。

研究部はスタッフ7名、準職員、リサーチアシスタント、大学卒論生などで約20人が常時研究に従事している。細川首相の年頭記者会見における「21世紀ビジョン」の2番目に掲げられたのが、「がん克服新10ヶ年戦略の策定」である。国家的支援体制のある中で研究できる環境にあることを深く感謝している。価値ある研究を行うことが最大の課題であると云える恵まれた環境と思う。但し、家庭とサイエンスの両立という立場からは、一層の国家的、社会的な支援体制の拡充が必須であると思う。



夢を追いかけて

千葉大学薬学部助教授 筍川 節子（昭和45年卒・47年修士了）

貴方は、五十嵐先生の「お願いしますよ」の元気な声を断われますか？！というわけで、原稿に向かっているのだが、なかなか文が書けない。私にするとめずらしいことである。なぜかと考えてみると、「女性の社会進出」って当たり前のことじゃないのと思っているからである。誤解の無いように申し上げると、私は現在、大学の教育研究職にあるが、これは「社会進出」しようと思ってなったわけではない。私自身の夢を追いかけてきた結果がこうなっただけである。もちろん途中に転機はあったが、気長に自然体で切り抜けてきたのではないかなと思う。「意志あるところに（のみ）道は開ける」ということであろう。傍から見て恥まれないと思われているだろうなという時も、今は自分のポテンシャルを蓄える時と勉強した。確かにここ2・3年の不況で、女子学生にしづか寄せが来ているが、21世紀に向かって日本が生き残るために、皆さんのような優秀な知能を生かすしか資源がないのである。皆さんを粗末に扱うような企業には未来はない、憎まれ口を言ってみましょう。少しいい気持ちになりましたか？といつても皆さんも私と同じように、この期間、皆さんがそれぞれもっている夢の実現のためのお勉強をしてほしい。皆さんに身につけた実力が評価され、夢が叶う日がきっときますよ！



後輩女性に残すもの

大正製薬株式会社 2部次長 鈴木 君子（昭和47年卒）

千葉大学に入学して間もない頃、某教授が「薬学部は女性が多く華やかで皆さんに会えるのはうれしいが、毎年教えるはり合いがない。何故なら一生懸命教えても結婚してすぐ家庭に入ってしまう。僕の教えたことはあまり活きない。国税で教育を受けているのだから、せめて5年間は働いて社会に貢献して欲しい。」と言われた言葉が何故か心に残り、よし5年間はという思いが、いつの間にか22年になってしまった。

私は卒業以来製薬会社の臨床開発一筋で全国の大学病院の教授へ講師との共同研究・対応が主であり、今でこそ親しいつき合いをさせていただいているが、入社間もない頃は「若い娘が……」という感はぬぐえなかった。当時は入社5年も経つと同期の女性はすっかり結婚退職という時代だったので止むを得なかつたのだろう。しかし最近は結婚・出産後も仕事を続ける女性が増え、特に結婚を意識せず仕事に打ち込むグループもいて隔世の感がある。また育児休職、授乳のための勤務時間短縮などそれなりに社会環境も整備されてきている。

しかし能力的には決して男性に引けをとらない女性であるが、まだ社会に十分受け入れられていないのが現状であろう。管理職の立場で女性社員を観ると2つのタイプに分かれる—①結婚後も仕事を続ける意欲のある人、②与えられた仕事はこなすが結婚迄の腰掛け。優秀で男性と対等に仕事を任せてもある日突然「結婚退職したい……。」と言われては10年がかりのプロジェクトは途切れてしまう。“やはり女性に任せるべきでなかったのか？”という後悔に似た想いが湧いてくる。このくり返しがあまり女性に期待をもたない社会環境を作って

しまうのではないか、せっかく意欲のある新入社員がいても、彼女達に幻滅を与えてしまう社会環境を作った一因は実は女性自身にあるのかも知ないと考える今日この頃である。

しかし同業の中にも重職を務め社会を動かしていると感激させられる女性管理職の方は徐々に増えており、こうした先達の女性の実績の積み重ねにより、ゆっくりした中にも着実に女性の社会進出を受け入れる環境が作られつつあると思う。今を生きる私達もこの流れを帶らせることなく、より着実なものにしていく様、後輩女性のために確かな足跡を残していきたいと思う。



病院薬剤師の地位向上をめざして

船橋二和病院 小峰 千鶴（昭和54年卒）

私は、卒業後ずっと病院薬剤師として働いています。その間に、結婚、出産とありましたが、働き続けてこられたのは、条件があったからでしょう。1つには、職場に、子供が病気の時みてもらえる保育所があった事、2つめは、既婚者も多い職場であり、仲間同志思いやりを持って働ける事、そして3つめは、夫の協力があるから、（共同生活なので、当たり前とも思いますが。）です。

さて、病院薬剤師として、現在私がやっている仕事は、入院患者さんへの服薬指導、調剤、D.I活動、注射薬管理等です。（当院は、医薬分業しており、また、92年6月より、投薬の施設基準を取得しています。）特に、患者さんのベッドサイドへ行っての服薬指導は重要です。医師は、とかく薬の有効性のみを重視しがちですが、より安全に薬が使用されるよう、正しく使われているかチェックしたり、副作用の有無を確かめたりする事が、薬剤師の大事な役割だと思います。当院では、癌化学療法剤投与の患者さんの口内炎予防のために、プロスタグラミン製剤の内服を医師に助言し、成果をあげています。これらの活動をするためには、D.I活動や、たゆまぬ勉強が必要です。（時間がなかなかとれないのが悩みですが。）薬剤師の社会的評価は、まだまだ低いと思いますが、薬剤師職能の開拓のために、また、女性の社会的地位向上を願って、私も微力ながら、今後も一翼を担っていきたいと思っています。



“女性だから”冒険したい

第一製薬株式会社 開発研究所 鍵本 紀子（昭和63年卒・平成2年修士了）

私は鈴木徳治教授ご指導のもと生物薬剤学研究室で3年間お世話になった後、第一製薬開発研究所にて学生時代に引き続き薬物代謝研究に携わり、新薬開発に従事しております。製薬会社の研究所というところは一般的に大学の研究室と環境があまり変わらないと言われております。しかしながら、実際は企業の当然の目的である営利追求に限りなく貢献しなければならないという点で大きく異なり、山積みされた業務vs研究の狭間で苦しんでおられる方も多いと思います。私も研究者としてまた企業人として微妙な立場に身をおくことに未だ戸惑いを覚える日々を過ごしております。

社会に出てまだ4年足らずであるためか“女性だから”といって遠慮を強いられる機会に巡り会っておりませんが、今申し上げたような戸惑いに対し“女性だから”冒険できる部分もあるのではないかといつも心に希望をもちながら研究者としての道を開くことに専念しております。

大学では薬物代謝を通して“研究”的面白さを教えていただいたわけですが、企業に入ってからこれが新薬の開発上安全性を左右する重要な鍵であるということを改めて知ったときの感動は今も鮮明によみがえっています。この感動を糧にして、新薬創成という冒険に挑戦したいと思います。大学で受けた教育を大切にしつつ、これからも社会への還元に努めていきたいと考えております。



変わらぬのか、変えるのか

博士前期課程1年在学中 稲垣 陽子（平成5年卒）

将来自分は仕事をもつもの、と小さいころから思ってきた。母が仕事に出ていく姿を見てきたためか、女性が働くのを当然のように思っていた。

制度上、女性が働く場が整ってきた。ただ社会に出ることにさえ大変なエネルギーが必要な男社会から、「女だから」で片付けない、選択の幅が平等の、そして実力が正当に評価される、あるべき社会に向かいつつある。とはいって、女性が働くことには、社会的受け皿も、一人一人の意識もまだまだ足りない。

ある大学の女性の助教授が、「遅くまでいると、年配の方が『家族が待っているよ。早く帰れば』と親切に言うが、余計なお世話と思う」とおっしゃった。それを聞いて、母が通勤の電車の中で、家族と仕事の頭の転換ができると言ったのを思い出した。家庭をもつ女性は、自分なりに仕事との切り替えをしているらしい。

キャリアを目指すが子供も欲しいという彼女がいれば、子供を育てるのが夢だから、結婚したら仕事は辞めると言ふ断言する彼女もいる。そんな「彼」もいるような、多様な生き方を受け入れる社会がいい。まずは「当り前の社会」を築こうと、努力が続いていることを意識している。

女性のいない分野へひとり進出するより、少しでも多くの女性が働きやすい現場作りの力になりたい、と今は思う。男女の区別はあっても差別のない社会を目指したい。

★研究室紹介★

薬品製造学研究室



薬品製造学という名の教室は、製薬化学科が増設された昭和41年にはじまるが、その歴史は古く、新制大学薬学部が創設された昭和24年まで遡る。当時医薬品の製造法を中心にその周辺の化学を教育することを目的として薬品化学教室が新設された。初代教授は故宮木高明先生で、池田仁三郎名誉教授が講師としておられた。昭和38年宮木先生が解散研究所長に選任され、昭和46年まで併任されたが、昭和38年には池田先生が教授に昇任され、実質的に薬品化学を担当された。昭和41年学科拡充に伴い、薬品化学教室は化学を中心とする薬品製造学教室と薬理を中心とする薬品化学教室に分かれ、池田先生が初代教授として薬品製造学を担当されることになった。そして池田教授退官後、昭和63年石井永先生が第二代教授として就任され、現在に至っている。現在（平成5年度）の教室員は、石井教授、石川助教授の他、大学院生6名、卒業実習生5名の合計13名である。薬品製造学教室となってから後、昭和53年には村上泰興講師が東邦大学薬学部教授へ、平成4年には原山尚助教授が岡山大学薬学部教授へ、それぞれ転出され、またこの間光井英基、細谷勝弘、川鍋（現姓櫻田）恵理の旧職員が教室発展のため尽力された。

当教室は、天然物化学と反応や合成化学を中心に研究を展開している。これまでの主たる研究テーマは、キノン系化合物の研究、異常フィッシャーインドール合成、ミカン科植物成分の研究、抗腫瘍性ベンゾ[C]フェナントリジン型アルカロイドの化学等があげられ、それぞれに大きな成果をあげてきた。現在、医薬品の開発ということを常に指向して、①天然資源からのリード化合物探索、②生理活性内因性化合物の有機化学的研究、③生理活性天然物の合成、④汎用性のある反応の開発等について鋭意研究を行っている。

（石川 勉）

活性構造化学研究室



当研究室が生物活性研究所から薬学部に移って、はや6年が経ち、引っ越しのゴタゴタから始まりようやく研究・教育活動も軌道に乗り、その成果を上げてきております。今回は当研究室の最近の活動・現状、今後の予定などについて紹介いたします。

研究室の人員は、山崎幹夫教授（薬学部長）、藤本治宏助教授、奥山恵美助手、中村智徳教務職員（93年4月より）の4人に、学生として博士課程3人、修士課程7人、学部4年次5人という構成で研究に取り組んでおります。

研究のテーマとしては、以前より一貫して行なって来た、カビおよびキノコなどの菌類と、新たに植物を中心としたボルネオ、インドネシア、ペルー、中国などの伝承民間生薬等を素材として、免疫調節作用、MAO阻害作用、中枢抑制作用、鎮痛作用、血管平滑筋収縮抑制作用などの活性を有する天然有機化合物の探索を行い、医薬品先導化合物の発掘およびその層の拡大の一助となることを目的に研究を行なっております。その最近の成果の一部は、天然有機化合物討論会、生薬学会、薬学会年会等で発表するとともに、Chem. Pharm. Bull.、J. Nat. Prod.、生薬学雑誌、薬学雑誌などに投稿いたしました。

次に研究室での毎日についてですが、学生たちは自他ともに認める真面目（？）集団で、毎日夜遅くまで研究に熱中しております。動物実験を指標に、化学的知識を駆使して抽出エキスを分画していく、さらには単離した化合物の構造解析と薬理活性の確認を行うという幅広い実験を各々一人でこなしていくのは楽しくもあり、苦しくもありますが、この経験が将来学生たちの利益になってくれればというのが私達の願いです。

（中村智徳）

膜機能学研究室



薬学部に所属する研究室としては聞き慣れない名前だと思うでしょうが、確かにこのような名前の研究室は日本の何処の薬学部にも有りません。私共の研究室は元をたどれば千葉大学の唯一の附置研であった生物活性研究所の生体膜研究部です。研究所の改組に伴い、昭和62年4月より薬学部所属となりました。従って、長い歴史を持つ薬学部の中では新参者と云う訳です。研究室の名前については移転のとき、もう少し薬学部にふさわしい名前は無いかと云われましたが、色々考えた末、膜機能学研究室としました。膜機能に関する研究は飛躍的に前進し、生体の機能解析には欠かせない分野です。

私共の研究室は林万喜助教授、中村辰之介助手と私の三人の職員からなる小さな研究室ですが、エネルギー生産で最も重要な呼吸鎖の研究を主なテーマとし、イオン輸送系の解析も進めています。今までの研究で特筆すべき成果は海洋細菌の呼吸鎖に存在するナトリウムポンプの発見でしょう。この仕事は今も中心テーマで、電子伝達とイオン輸送の共役反応を分子レベルで解明する必要があります

薬学部に所属しながら、薬を直接扱わないのは如何なものかと問われるかも知れませんが、私が薬屋で育った関係で、薬には人一倍関心が有ります。それゆえ、学生には生体の微妙な調節機構を正しく理解した上で、薬のことを考えてもらいたいと思っています。そのためこの研究室が役立てば幸いです。これらの薬学は今までのように画一的な構成に縛られず、個性的で自由かったつな教育・研究が促進されるよう望んでいます。

(畠本 力)



薬品化学研究室



薬品化学研究室は薬学部に製薬化学科が設置されるに伴い誕生した研究室で、昭和45年3月以降、毎年多くの卒業生・修了生を世に送り出している。初代は原田教授、現在は渡辺教授が教育・研究活動を牽引している。四大講座制の下では薬効・安全性学講座に所属し、化学薬理学・薬品作用学を基礎に置く実験薬理学的研究方法を用いて合成医薬品や天然薬物の薬効評価と作用機序解析を目的とする研究を行っている。

これまでの主な研究テーマは1)消化性潰瘍治療薬の薬効評価と病態モデルの作成、2)胃液分泌の中枢性制御機構、3)細胞内情報伝達系と薬物作用、4)神経伝達物質と薬物受容体機構、5)天然薬物・民族薬物の薬効評価と薬理活性リード化合物の検索、などである。

生命科学の基礎研究の著しい発展とともに私達の研究の対象および手法も大きく変わっている。消化性潰瘍治療薬は胃酸分泌を抑える目的ではヒスタミンH₂遮断薬やプロトンポンプ阻害薬、さらには抗ガストリン薬を加えた薬が開発された。こうした薬物の開発には日本の製薬メーカーも大いに貢献しており、その素地を作る上で私達の研究室の果たした役割も極めて大きいと自負している。この面での今後の課題は“本物”的粘膜防御・治癒促進薬の開発である。一方、主要な自律神経作用薬の研究に一区切がつけられた今、受容体サブタイプに関連した有用な薬物の検索、最近明らかにされた“NO神経”、古くて新しい“アミノ酸神経”的役割の解明が急務となっている。これまでの研究からも新規の生体反応の発見や定説では説明できない知見が得られ、その成果を世に問うている。

現在、研究室では全身レベルの動物実験系から細胞系までの研究態勢により薬理作用を解明することに努めている。研究のアイデアだけはたくさん持つて研究室一同は日々、研究に取り組んでいる。

(矢野眞吾)

クラス通信



昭和3年卒業（思葉会）

薬友会誌の本旨には悖るかもしれないが、学生時代から嗜んで参った尺八に就いてご紹介したい。尺八は楽器としてリード（振動板）が無いのを特徴としている。リードの役目をするのは歎口ではなくして、唇から流れ出る呼気の形と強さに依り、それが吹奏者の先天性に関する處に芸術味がある。吹奏楽であるから、虚心・平常心を保つことが肝要で、平静を失うと、呼吸が乱れ完全な吹奏ができなくなる。この尺八を在学当初から今日に至るまで63年間（継続開軒）に亘り、楽しんで来ております。

ところで、昭和3年卒思葉会前代表の松岡さんが亡くなられた後、小生が代表に指名されたことが周知されずに、その後、同窓生の死亡通知を受け損なって、小生が知らないで居たケースが2件ある。そこで、死亡、その他の事情で卒業年度別代表者が交替した場合、それが存命者の家族にも判るように、周知徹底できる何等かの対策をお願いしたい。（丹野雅道）

昭和5年卒業（五葉会）

学校を卒業し、今まで何をしてきたのか、たゞ茫然としている間に早や60数年の歳月が流れている。いま古い名簿をみると卒業時58名の氏名が並んでいる。既に他界した者が多く39名あり、その残りが19名となり毎年5月にある五葉会（クラス会）の出席者は近年遂次減少の傾向にある。昨年は僅か7名であった。会は一昨年まで殆ど一泊で箱根湯本温泉だったが昨年から東京都内での食事会に変更したが色々な事情で出席者は年々減少の状態、幹事として実に寂寥たるものあり、慨然の情致らしい。入学して一年ほど船橋から汽車通学、千葉駅から学校まで雨風の区別なく徒歩、千葉神社の横を通り、大和橋、病院坂を経て附属病院正門から右へ松並木の小径を過ぎると薬学部であった。列車通学の往復に要する時間が惜しまれ、後には船橋から千葉市へ下宿を変更することになった。これら戦前昭和初期の千葉を憶うと懐み、あたかも夢を見ているようだ。一老人の思い出。（石田 新）

イワキ株式会社
岩城製薬株式会社

取締役会長 岩城 謙太郎
(昭和15年卒)

〒103 東京都中央区日本橋本町4-8-2
電話 03-3241-2070

昭和8年卒業

昭和8年卒業以来61周年を迎えて全員が81才以上になり過半数の学友が世を去りました。故人の方々に対し謹んで哀悼の意を申しあげます。昨年二月迄は生存の方方が多かったのですが僅か半年の間に二割の数の友との別れは厳しかった。しかし今年も二泊三日の同窓の集いを企画しています。7~8人位は集まる予想しています。次に学生時代の事を書きます。私達同期の5~6人は東京からの汽車通学で両国駅から千葉駅までは前回話しました。千葉駅から学校迄を15分間位で病院坂を駆け上がり、軍事教練の規定時刻に遅刻しなかった若い頃の事が思い出される。

（前納 勇）

昭和11年卒業（土葉会）

1月7日に宮城島正造君が死亡され昭和11年卒業のときは50人いた土葉会員は生死半ばとなり生存者25名中音信不通のものが4名、病氣療養中の者が5、6名で、どうにか健在で呼びかけても出席するものは10名前後になってしまった。昨年は前同窓会長の岩城謙太郎氏の提案により昭和13年卒の藤沢栄一君の御骨折りにより昭和10~26年に木造の亥鼻が丘にあった旧制の薬学専門部卒業のOBに呼びかけ、いのちはな会として3月24日正午に日本橋クラブで第1回の会合を持ち、昼食を食べながらいろいろ話し合った。第2回は10月15日に開催されたが2回共便乗して、本田君、山口君と3人で分担して、同窓生に電話で呼びかけたら3月は12名、10月には9名参加者があった。一次会場から歩いて5分の薬業厚生年金基金館で二次会を開いて旧交を温めた。また今年もいののはな会に便乗する予定である。（大河原五郎）

昭和13年卒業（亥丘会）

1) 富永大六君が、昨年10月11日肝臓癌で急逝された。同君は海軍を振り出しに、官界、企業、薬局経営と多彩な人生を送られた。心からご冥福を祈る。
2) 卒業55周年記念総会が、小野口、飯豊両幹事のお世話で昨年5月27・28日に湯河原で開催された。久し振りの会合で互いに古き亥鼻時代を回顧して話題が盡きない一夜で、最後に校歌を合唱して漸く眠りについた。

（出席者氏名）飯豊章司、泉 富雄、小野口邦夫、狩野貞太郎、坂本晴名、鈴木九一、滝川順三、中込正一、藤沢栄一、水野辰郎、横山善夫、吉田 優、日比野辰

いのち、ふくらまそう。

第一製薬株式会社

〒103 東京都中央区日本橋三丁目14番10号
03(3272)0611(大代表)

Letters from Alumni

太郎の計13名

3) 上記総会で今后3年間クラス幹事は泉君に決まった。就任の第一の仕事として、同君はクラスを代表して富永家を弔問した。なお千葉薬友会との交渉は藤沢が引き継ぎ担当する事にした。
(藤沢栄一)

昭和14年卒業

平成5年、3月、4月、10月に、竹下盛秀君、菊池博君、河井謹三君の三方が逝去されました。心から、ご冥福を祈ります。

創刊号に投稿した通り、毎年10月にクラス会を開くことが定着していましたが、今年(平成5年)は、色々の都合で開けませんでしたので、お詫びをかねて代って近況のご報告をお願い。お寄せ下さった16名の近況をそのままコピーして誌上クラス会として、26名方にお配りしました。共通していることは、専ら健康に関する事でした。強気、弱気の差はあっても、切実に老いを感じ始めていることが、わかりました。それなのに、ニュアンスのある文面で、楽しく、なつかしく、或は身につまされる思いで読まさせていただきました。良いことをしたと思いました。来年は是非クラス会を開きたいと思います。
(副神益夫)

昭和15年卒業(二六会)

平成5年6月14日、三年間休んだ二六会を日本橋俱楽部にて開催した。韓国から沈君が参加し、出席者11名となり懐旧談に花が咲いた。その席で、今後は毎年二六会を開くことが決った。加齢すると半年先の健康に自信が持てない、というのが主たる理由であった。後日、武田君からいただいた全員の記念写真を焼増してもらい、欠席者へ配送した。それに対し応答があり嬉しかったが、葉 天徳君の訃報には愕然とした。葉未亡人からのお手紙では1991年9月の中国薬剤師大会に出席後、観光ツアーを終えて南京飛行場に着き、友人らと歓談中に突然倒れ近くの陸軍病院で治療したが、そのまま不帰の人になったとのこと。同級生の皆様によろしくとあったので、ここに記す(合掌)。
(石丸正美)

昭和16年3月卒業(一葉会)

前号は休みましたので、平成4年、5年の2ヶ年分の報告。

平成4年6月16日、外房勝浦、三日月ホテル、一泊、

15名集合

平成5年2月21日、新宿小田急デパート、13階、さがみにて会合15名

平成5年10月17日、静岡県焼津グランドホテル、一泊、13名集合

平成6年度は5~6月頃、伊豆方面で開催予定で準備中

朗報 名誉の叙勲者は、飯森、海老澤、平田、元山の諸君、本年は、更に、数人が続く予定。

訃報 座親義郎君 平成2年10月15日 遊去

陳顯德君 平成4年1月28日 遊去

福島英一君 平成5年5月19日 遊去

生存者30名の健康を祈り、物故者15名の方々に合掌。
(向井廣澄)



昭和16年12月卒業(宣葉会)

1941年当時の大東亜戦争開始の時に卒業、50名のクラスメートは丁度半分の25名が健在。昨年春には台湾の温さん、今年になってわかったのですが、暮のクリスマスに函館の星野さん、お2人が天国に旅立ちました。年齢の順と思いつつも寂しさが増します。昨年は亥鼻会の開催につづいて、日本橋で昼間のクラス会を10月15日に催しました。温さんの追悼をかねて10名集い、旧交を温めました。70才を越した我々、お互いに身体に気をつけていつまでもお元気で! 今年もクラス会でお会いしましょう。
(安田英夫)

昭和17年9月卒業(翠葉会)

卒業50周年記念クラス会を終り、本年の幹事に中島君、松家君をお願いしました。年々病気の方が増えていますので、お見舞いクラス会を東北の藏王温泉に企

技術は人にあたたかい
MEDICAL FRONTIERS
 大正製薬

本社 〒171 東京都豊島区高田3丁目24番1号
☎03-3985-1111(大代表)

武田薬品工業株式会社

〒541 大阪市中央区道修町四丁目1番1号
TEL.06-204-2111(代)

画し、元気な山形の斎藤君にも幹事をお願いして設営に協力してもらいました。3月に福島の川上君が亡くなり、会津の神山君は外出不能と目論見がはずれましたが10月17、18日予定通り開催し、幹事、小幡、新井、金子、恵志、堤の8名が出席しました。席上川上君の冥福を祈念した後、時を忘れて思い出話に耽りました。齡70才をこしましたが、現存者は29名で半数は第一線で活躍中です。今年は東京近郊で開催します。多数参会を希望しています。
(堤保二郎)

昭和19年9月卒業（蒲の穂会）

本年は我々が卒業してから50周年をむかえます。従って年齢的には開局している者以外は年金生活者が大部分です。感覚的には世情の変革の速い流れには仲々付いていけないようです。毎年のようにクラスメートが欠けていくことは仕方がないと思いますが、元気なうちに出来るだけクラス会を続けたいです。不況のトンネルから仲々出られない昨今ですが開局者達もろに影響をうけています。数年前に台湾出身のクラスメートのお世話を初めて海外での旅行会をやり、大変喜ばれました。一方、個人的な規模の開局者の多い我々の後継者がすんなり決まるには21世紀になり分業の進み具合が影響すると思うと安闇としていられない思いです。

昨秋、クラスメートの茂木武男君の叙勲が決まったことが我々仲間にとって、明るい話題となりました。
(中島祥行)

昭和20年卒業（るつぼ会）

平成5年度は2月21日より特別クラス会を台湾で開催。現地の王さんの参加を得て、細川夫妻、大谷夫妻、坂本、吉田、田村、原の9人で高雄、台北を廻ってきました。6月5日の定例クラス会は恒例の上野にて中川、和田、大谷、横田、本宮、当山、原、吉田、坂本、宮崎、西川、田村、玉木、山田（精）の14名の参加で盛大に開催されました。

平成6年度は特別クラス会を3月9日～13日の4泊5日で香港にて開き最終日は中国（深圳）にまで、足を延ばして楽しい旅行とする計画です。定例のクラス会は6月11日（土）5時より恒例の上野「蓬来閣」にて開催されます。尚平成5年度には次の諸君の訃報に接しました。謹んで、ご冥福をお祈り申上げます。松本邦夫君、牧田清則君、内藤保雄君。
(原 文男)

昭和22年卒業（臥豚会）

昭和22年卒の臥豚会は、ここ8年位クラス会を開いておりません。内蒙古医学研究所副所長のウナン・バイル君が来日した時に集まつたのが最後です。次回は長野県でやりたいと思っています。同級生では安藤 吉治 病院薬局を退職してから調剤薬局づくりをしている
遠藤 英美 都立衛生研究所を退職後帝京短大の教授
小林富治郎 長野県薬剤師会長で分業は勿論最右翼の存在
井出 敏夫 長野県佐久薬剤師会専務理事
長野県佐久事業協組専務理事
芹沢 恒夫 東京台東区で開局、都薬國保の常務理事
中島 良郎 厚生省→三井製薬工業→日本薬剤師研修センター常務理事
岡本 光博 横日本薬局協同会副会長
本多 昭二 城南総合病院
吉越 昭 平成4年没 東北大理学部教授
(塩崎國夫)

昭和23年卒業

平成5年11月20日（土）に同期会を新橋「新橋亭新館」で開催致しました。出席者21名で今回は久し振りに酒田市より遠路、菅場忠一郎さんが出席され、又湯沢市より高橋久男さんが出席予定でしたが御仕事の都合でやむを得ず欠席とのことで、大変おいしい地酒を寄贈頂き、出席者全員で賞味致しました。午後2時より会を始めましたが近況報告から始まり、年令的には会社を既にリタイヤした我々ですが昔に戻って、楽しい時間を過ごしました。次回も東京在住の人が中心で開催予定です。
(井上富夫)



トアリヨー株式会社

〒104 東京都中央区京橋3丁目1番2号
電話 03(3281)3888

株式会社 常磐植物化学研究所

代表取締役 立崎 隆
(昭和41年卒)

千葉県佐倉市木野子158
電話 043-498-0007

昭和24年卒業

戦前、戦後の昭和の激動期を経てきた吾々にも卒業して45年、歳も65才前後になり、云わば人生的節目にさしかかったところですが、同期の諸兄は今が青春、楽しく貧乏?暇ありと、35名それぞれの分野で頑張っております。

昨年も千葉県在住者が幹事になり銚子市の宮内良夫君のお世話で、犬吠崎海岸灯台前のホテルで、クラス会を開催しました。参加者15名(欠席近況報告者11名)晩春の太平洋の荒波の碎けける潮騒のもと、新鮮な海の幸の活造りに舌鼓みを打ちながら、お互い夜の更けるのも忘れ語り明かし、翌日は峰島智君のお骨折で「ヤマサ醤油」の見学、本醸造の過程、単に調味料だけでなく、医薬、試薬、診断薬等、ニューバイオの開発分野まで説明を受け、久しぶりに、皆若き学者の頃を思い出し、有意義な一泊二日の旅でした。

本年は埼玉県在住の牛島寿平君が代表して設営してくれることになりましたので、再会を楽しみに、又多数の参加を期待しております。(青山和夫)

昭和25年卒業

25年組は卒業35名、物故8名、消息不明2名で、現在は25名。このうち9名が平成5年10月佐子君の世話を駆けの小作な店で会合、池田、石井、小森、久保田、佐子、高橋、田中、山之内、鈴木(昭)が出席した。欠席者からも殆ど全員近況が報ぜられ、皆、仕事に、趣味に相変わらず前向きに取組んでおられ御同慶に堪えない。ただ健康については年齢相応に一病息災また好しとすべきであろう。

残念なことは酒井君が去年5月他界。弔事は田辺の同僚池田君に何かと世話をになった。

今年は久保田君の肝煎りで9月上旬鷹高か大町の温泉郷一泊を予定している。夫人同伴大歓迎の由。今から日を空けて再会に備えて頂きたい。詳細別途後送。(鈴木昭治郎)

昭和26年卒業(26組のはな会)

毎年4月の第2金曜日に開催を決めています。恒例の26組のはな会を次の要領で開催致します。

期日 平成6年4月8日(金)

会場 熱海市 山木旅館

時間 午後6時30分

(福島 靖)

昭和31年卒業(千葉葉三一会)

平成5年6月5日、東京丸に25名が集まつた。タイより帰国した三木(みつき)忠氏の日程に合わせたクラス会で、東南アジアの文化・経済の状況、農園(千代田区程の広さ)での植林、栽培、葉の採集、目的の薬効成分(ラウノトール)抽出のプロセスなど現地における6年間の苦労話を聞き、我々が医薬として利用している植物成分入手と環境保全・国際協力の実態を知ることが出来た。還暦を迎えた諸氏は、真っ黒に日焼けした人が多かったが、その原因是ゴルフではなく、自然農法であり、堆肥作りから、草取り、散水と野菜の収穫に至る晴耕雨読の生活であった。

(星 昭夫)

昭和33年卒業

平成5年5月29日(土)、卒後満35年の祝賀も兼ねてクラス会を開催した。山根靖弘先生を来賓にお招きし、男性15名女性9名の24名が、安房小湊の豊明殿で歓談の一夕を過ごした。神の恵み佛恩か吾がクラスは29年入学以来、学部長の要職を務められた渡辺和夫教授を含め44名全員が健在である。幹事としてはもう少し出席者が多ければと思うところだが、これは一同の活動度指標と考えたい。老令化社会が進む中、吾々もその仲間入りをする年代に突入しつつある。健康と医療の一端を担う教育を受けた人間として年令を越えて世の中に尽すことが出来ればと願っているのは筆者の独善か。

(六反田 朗)

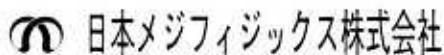
昭和34年卒業

平成5年9月11日(土)、今年度のクラス会が新宿西口駅前の「きくまさ」で開催された。

出席は沖縄から山川君、大阪から野村君、神戸から武田君など遠路からの参加組を含め18名が出席した。

本年の最大の話題は、安部さん(旧姓細谷)、西井戸さん(旧姓赤羽)の2人が未就業薬剤師就業促進研修を受講して、調剤薬局で働きだしたことである。開局者3名のみという医療薬剤師の少ない我がクラスにとって、これは快挙である。折角、薬剤師になった以上、第2の人生は是非とも調剤をやりたい、との声もあがっていた。

平成6年は卒業35周年を迎える。記念大会として、野村、武田両君の幹事で神戸市において開会を決め、10時過ぎに散会した。(小川通孝)



〒102 東京都千代田区九段北 1-13-5
☎ 03-3234-2910



ファルミタリア カルロエルバ株式会社

本社: 東京都港区虎の門4丁目3番1号
秀和神谷ビル
電話 (03)5402-8631 (涉外部代表)

平成6年7月1日より

ファルマシア株式会社

に社名変更致します。

Letters from Alumni

昭和36年卒業

会社人間なら停年でしょうか。開校以来初めてどっと増えて先生達を嘆かせた？女子側からの近況です。未だ子供が小学六年生という人もいますが、大体子育てを終わったか見通しもついて、その後の人生に思いを馳せている所です。開局の人には停年がありませんが、今迄の仕事にきりをつけたり、逆に再就職したりしています。又趣味で絵を描く、ピアノを習う、バッチャーワーク、山歩きなどずっと続けていたり再開したりして、遂に二科展に入選してしまった人がいます。以前なら敬遠気味の薬業会、薬剤師会の会議、英語もままならないのにFIPに出席する人もいれば、人生をまとめねばと考える超まじめ人間もいます。現実には薬局、研究所、病院などで、職能を活かしている人が殆どです。
(中島久美子)

昭和37年卒業

昭和37年卒業同期会：同期生44名中42名が健在。カナダ、札幌、広島と散って生活しているが、毎年交わす賀状と2年に一度の同期会で互いの消息を確かめ合っています。

平成4年は卒後30周年に当たり、23名が参加して銀座でパーティを開いた。今年は渡辺綾子さんと私の幹事役で5月21日に帝劇の観劇を兼ねて東京でパーティを企画。卒業以来始めて参加と言う遠方からの方もあるとの事で楽しみにしています。
(中嶋基之)

昭和38年卒業

平成5年10月23日に神奈川県湯河原温泉「越前屋」で、卒後30年記念のクラス会を行いました。幹事の不手際がありましたが、総勢17名が顔をそろえ、一人ずつ近況報告をするなど賑やかな宴会となりました。二次会は宿の一室に全員集まり、学生時代の思い出などに夜半過ぎまで話がはずみました。貴繩十分の実年諸氏もひととき30年前の青春時代の気分にひたり、学生仲間はつくづく貴重なものだと思います。

翌日は絶好の行楽日和で、近くの熱海MOA美術館で芸術の秋を堪能した後、再会を約して散会しました。なお次期幹事は、水野、横田、川久保の三氏にお願いしました。
(原口克介)

昭和39年卒業

光陰矢の如し、私達のクラスは卒業後この3月で丁度30年経過したことになります。前回のクラス会から既に3年経過しましたので、本年は卒後30周年を記念して盛大なクラス会を行いました。クラス会が原稿締切と重なりましたので、詳細は次号で報告致します。また栗ちゃんがイスラエルの留学体験とその後のイスラエルに関する研鑽を「ありのままのイスラエル」という書にし、柏書房から上梓しました。是非御一読下さい。
(五十嵐一衛)

昭和41年卒業

昨年度は和田兄が執筆され、本年度分のお鉢が小生に回ってまいりました。我々の年齢になりますと、毎年そう大きな変化はありません。昨年の10月に、都内の料亭で同級会を持ち14名が参集致しました。昨年の一泊旅行の後でもあり、遠来の方もなく例年に比し淋しさを感じましたが、盛会でした。昭和41年に卒業し、早や28年。齡い50の節目、この時に立ち、皆何かを考えている時期です。激動する経済の渦、溢れる情報の渦に翻弄され、福祉医療行政の一翼を担い社会の一員として寄与貢献し、会社人にとっては残り10年を切りつつあります。一休みし後を振り返るもよし、前をみつめ人生に思いを巡らすもよし、自らの哲学を持つ年代になりました。同級生の話題は、次回の執筆者にお譲りし筆をおきます。

最後に既に鬼籍にある岸、金子の両君の御冥福をお祈り致します。合掌
(深草佑一)

昭和42年卒業

卒後27年、道はそれぞれ別れても、クラス仲間は…在学中は一見平凡、よくよくみれば多士済々（正しくは変人？）しかしながら結局、行きつくところは、似たり寄ったり。会社では、中間管理職となり、上下か



▲Yamanouchi

山之内製薬株式会社

〒103 東京都中央区日本橋本町2-3-11
電話 03-3244-3000 (大代表)

吉富製薬株式会社

〒541 大阪市中央区平野町二丁目6番9号
電話 06-201-1600

Letters from Alumni

ら、家ではカミさんや子供から圧力をかけられて右往左往している。その一人である私は「春は恐山でイタコと雪の世界を語り、夏はねぶたと共に跳ねて、地方文化に参加し、秋は薬研で紅葉と温泉（露天風呂あり）を楽しみ、冬は金駄山や八甲田山でスキーを乗りまわし（津軽美人と…）、自然との調和を図る毎日である。しかしその実態は…単寢父忍の北彩紀行中である…トホホ…。

今後のクラスの予定としては、卒後30年の大クラス会をバーッと派手にやろうと思う。（齊藤 弘）

昭和43年卒業（若竹会）

オリンピックの年毎に開かれる若竹会。平成4年秋、関・小林両幹事により明治記念館で催された会には44名中25名が集まった。

卒後25年、男性は製薬会社等の職場でそれぞれ社会的地位を築いている。一方女性でも対等に仕事を続けている人もいるが、家庭に入り子育ての時期を経て再び薬剤師として働き出した人も多い。中には大学院に進んだ人もいる。ちなみに渡辺（旧姓外川）さんは、卒業後医者の道に進み、産婦人科医院を開業しているが産婦のためのエアロビクス教室を開くなど活躍中である。筑波大の職を辞し、昨年夏ドイツ留学に颶爽と旅立ったのは羽柴（旧姓下平）さん。マックスプランク研究所で免疫に関する研究に熱中している。趣味豊かな男性陣の中でも特に針灸師として働く石村氏は、仕事とマリンスポーツ、合気道に費す時間が殆ど同じという充実的人生。

次回はアトランタ五輪の年。幹事の三上・西尾さん宜しくお願い致します。（松本妙子）

昭和44年卒業

—女性の働き方から同窓会の意義を思う—

卒業25周年を迎える、男性11名、女性35名のクラスです。3回しかクラス会をしていませんが、1987年、15年ぶりに開いた時は27名（男性9名）もが集まりました。その時、女性のなかで、6名が継続して仕事をしていましたが、その他の人々は、結婚、出産、育児を機会に性別役割分担を受け入れ、一時的に仕事を退いたことがあります。しかし、人生の節目をいくつ越えた今は再び、薬学を生かした仕事などに就いている人が殆どです。女性が仕事を継続していくける条件が整いつつある社会情勢下、女性の労働権の確立の

ためにも、私たちは専門知識をしっかりと世に生かし、権利行使していきましょう。

そして、クラス仲間の活躍を聞くたびに、私もがんばろうと力づけられる、そのことがクラス会、同窓会の存在意味だと思います。（清島保江）

昭和46年卒業

我々の様な団塊の世代（45～46才）は時間に追いたてられ、暇の取れない世代である。平成3年7月にクラス会を開いてから公の会は全く開かれていません。昔、僅かな時間を見つけて家族サービスをしたり、自分の趣味を楽しんでいるに過ぎない。今年の海野君の年賀状に、昨年タイ、ロンボク、パソ等へ豪遊して来たとの報告があったが、羨ましい限りである。私はと言えば、開発業務の合間に、会社の若い人を連れて日本百名山を登りに行っている。昨年は高山植物が綺麗な早池峰山（岩手県）を初め3つ踏破した。まあ、こんな具合だから、同窓会が開けるのも50才までにあと1回あれば御の字であろう。（永井栄一）

昭和47年卒業

昨年は、一昨年に卒後20周年の同期会を催したので公式な集まりは持ちませんでした。今後は3～5年に1回程度の間隔で同期会を開いたらどうかと思います。

昨年の生涯教育セミナーには静岡からの参加や女性も含め同期6名の参加があり、久々にアカデミックな雰囲気に触れ、心がリフレッシュされた思いがしました。ミキサー終了後、全員で波谷で本格的なドイツワインを飲みながら歓談しました（翌日は、ひどい二日酔でした）。今後も都合のつく方は、心のリフレッシュにセミナーに参加されたら如何でしょうか？その折には石川、上野両先生または私に連絡して頂ければ幸いです。（遠藤 譲）

昭和49年卒業

私たちが卒業してちょうど20年になります。この間、クラス会は2回開いたはずですが、かなり以前のことではっきりしません。

私は、卒業後しばらくは大学によく顔を出しましたが、土曜が休みになって疎遠になりました。しかし最近、公開講座や生涯教育セミナーなどで大学を訪れる機会が増えました。講義室で20年ぶりの講義も受けま



株式会社 龍角散

代表取締役社長 藤井 康男
(昭和29年卒)

〒101 東京都千代田区東神田2-5-12
電話 03-3866-1177 (代表)

わかもと製薬株式会社

常務取締役 前田 孝
(昭和35年卒)

〒103 東京都中央区日本橋宝町1-5-3
電話 03-3279-1275

した。

薬剤師は、医療チームの一員であり、薬の専門家です。薬の製造や管理、供給及びその情報についての責任者なのです。

「薬学は、薬学士を養成するが、薬剤師は養成しない」といわれます。今、医療人にふさわしい薬剤師が要求され、平成8年に国試が見直されるそうです。当然カリキュラムも変わることでしょう。私たちは、うっかりすると取り残されてしまいそうです。私は薬剤師の一人として、私たちの職を一般人や医師から信頼されるものにする努力を続けたいと考えております。

(古館裕志)

昭和50年卒業

クラス通信の執筆を依頼され、指折り数えてみると、早いもので今年は卒後19年目を迎えることになる。振り返れば、これまでに開いた同窓会はわずか2回、学会等で毎年顔を合わせているメンバーは別として、卒業後ほとんど顔を合わせることのない人も多い。みんな40を過ぎて頭にちらほら白いものが見える「おじさん」「おばさん」になっているのだろうか。久しぶりに顔を合わせてその変貌ぶりをとくと拝んでみたい気がする。そこでこの場を借りて、来年あたり卒後20周年を記念した同窓会を開くことを提案したいと思うが如何であろうか。

(武藤里志)

昭和52年卒業

我々昭和52年度卒業生も不惑を超えた男性は髪の様子や体型もだいぶ変わり、また女性も子育てから解放され、それぞれ円熟期とも言う歳になってきました。

前回クラス会を開催してから年月もだいぶ流れ、そろそろまたという気になるのですが、なかなか億劫で声をかけていません。千葉市近郊にいる者で年に数回飲んだりカラオケで歌ったりしており、そんな話しも出ているのですが。

その中のメンバーの大森栄君は昨年4月より付属病院の助教授兼副薬剤部長で、また片野佐太郎君は千葉県立薬務課でそれぞれ頭を薄くしながら頑張っています。

今年あたりクラス会をと思っておりますのでその節はよろしくお願ひいたします。

(中村英雄)

昭和56年卒業

卒業してから早13年、今年は年男・年女の人も多い卒業年度です。クラス会は90年の夏に、海外へ行かれる袖岡さん・徳村さん(現在は野田さん)の歓送会として有志が集まってからすっかり間が開いてしまいましたが、女性だけのクリスマス会は毎年恒例となっており、昨年末も十数名が集まって楽しい一時を過ごしました。子育て真っ最中の方、子育てが一段落して薬局薬剤師としてまた働き始めた方、新しい仕事に転職した方、海外から帰国してより一層活躍されている方などなど…、会に欠席の方からも葉書で、また他の方たちの近況もいろいろと話を伺い、それぞれ状況は違いますが、皆さん新たな飛躍に向けてがんばっているのだな、としみじみ感じました。今年こそ、クラス会でお会いしましょうね！(下東さん、幹事よろしくね！)

(小松美加)

昭和58年卒業

大学を出てからはや11年が経過しました。仕事の責任は重くなる一方、3人目の子供の誕生といった便りも聞こえ、我々の世代も大変なお父さんの時代に入りつつあるといったところです。そんな折、今年の1月に伊藤太郎君が結婚、留年組も含め10人ほどの同級生が久しぶりに顔を会わせました。そこで話題のトップは、なんと酒井学君のご成婚。文通から始まったそうで、結婚式は3月とのこと。いきなり今年のトップニュースが決まってしまった感があります。あとは本間正充君が3月に米国留学から帰国、1月に浅野家に3人目(みんな男の子！)が誕生といった話しがありました。そうだ、3年ほど中断している79P+aの同窓会ですが、そろそろやろうともいます。その際はよろしくお願ひします。

(浦田昌宏)

昭和62年卒業

早いもので卒業後7年となります。その間、「88年と'90年に同窓会を行い、「これからも2年に1回は集まろう。」ということで次回の幹事もY君に決定しました。しかし、「92年は何事もなく過ぎ、「93年もとうとう同期会の連絡はありませんでした。

結婚式の二次会や研究室のOB会などがあると顔を合わせる同期もいますので、そんな時に近況を話したりましたが、以前に比べて結婚などの話題も散発的になった感があります。

きっと'94年にはY君のかけ声で同期会が開かれることでしょう。この欄でも最新の情報をおとどけできるものと思われます。

(松本 誠)

平成5年卒業

早いもので私達が薬学部を卒業し1年が過ぎようとしています。一足先に会社の荒波にもまれながら日夜仕事に追われている人、はたまた大学院に進み実験のデータに一喜一憂している人、進む道はさまざまでも毎日を充実して過ごしていること思います。

さて、私達平成5年度卒業生は初めての同窓会を昨年の12月に薬学部講堂で催しました。幹事が不慣れなこともあります。幸いにも60人余の参加者がおり、大変賑やかな同窓会となりました。忙しい中を遠路はるばる集まってくれた皆さんにはこの場を借りて御礼申し上げます。今年もまた同窓会で逢えることを楽しみにしております。

(藤田陽一郎・藤澤正枝)

平成5年度4年生

講義も終了し、各研究室で自分の研究を進めて行く日々になりました。違う研究室の人とは接する機会も少なくなり、「久しぶり」というあいさつをよくかわしている気がします。又通常の会話の中にも、専門的な事が出て来て、「やはり3年までとは違うな」と実感しています。思えば2年の時「薬学部始まって以来最も出来の悪い学年」とまで言われた自分達がこうしてまとまると(?)卒業へ向かっていると思うと何故かシミジミした思いになります。今年卒業する人は後少しでみんなとお別れですね。クラス全員参加の飲み

会でもやりたいものです（平成4年12月現在）。
（佐藤裕二）

平成5年度3年生

3年生になると教養部を離れ、毎日クラスメートと顔を合わせるようになります。しかし、全員で行動を共にするのもあとわずかとなりました。10月中旬より、学友会を中心に、ガイダンスや度重なるアンケート、会議が行われ、12月上旬に、自分達の進む研究室が決まりました。あとは教授会での承認、そして後期試験をクリアすれば、正式決定となります。

白衣姿もすっかり板につき、薬学生としての自覚も強くなってきたこの頃ですが、さらに大きな目標をもって毎日を過ごさねば、と思っています。（高島一恵）

平成5年度2年生

私たち平成4年度入学生は現在82名のクラスです。先生方のお話だと授業中うるさいクラスだそうです。出席率も必ずしもよいとはいえないでしょう。出席をとる授業になると結構みんな来るような気がしますが…。試験前になるとさすがにみんな一所懸命勉強します。情報の往来がやたら激しくなります。これが無かったら今の倍以上の人人が試験に落ちるのではないか？（そんなことないか？）

だいたいみんな何かしらのサークルには入っているようです。ただ他の学年に比べて薬学のサークルに入っている人は少ないように思います。（伊藤雅夫）

平成5年度1年生

晴れて千葉大学薬学部に入学したあの日から、もう随分、月日が過ぎてしまいました。私たちの学年は、個性の強い人が非常に多く活動的で、それぞれが自分の生活を楽しんでいます。今まで平成5年度入学生として活動してきたことと言えば、春祭、大祭ですが、ちょっと要領が悪く、赤字続きでした。学部内サークルは、相変わらず薬学テニスに所属している人が一番多いですね。薬学野球・薬学軽音楽も例年よりも多いようです。薬学茶道部は、やっと三人になりました。これは、去年とはだいぶ違うようです。ところが、「薬サ」という新しいサッカーサークルをつくろうとしている人たちもいます。

「とにかく明るく、元気」という私たちのカラーを持ち続け、これからも仲良くやっていくことでしょう。（竹中淳子）

支部だより

東京支部

平成5年11月12日、17時30分より日本橋俱楽部において東京支部総会を開催した。今回の役員改選では、支部長の交替を含め役員の大半がえりと女性幹事の強化を計り、又支部規約の一部を改正し、会員資格を首都圏在住者で入会を希望する者を拡大した。

特別講演は『新薬の開発と創薬科学と教育』と題する山崎薬友会会長のお話を拝聴した。夏目漱石や森鷗外の小説等を巧みに織り込み、極めて平易で理解し易く、会員一同大いに感銘した。

懇談会は三浦支部長の挨拶と新支部長の渡辺楷氏（S33年卒）の就任に抱負ならびに協力要請があり、更に来賓の山崎会長、山根名誉教授のご挨拶の後、秋の叙勲で勲三等旭日中綬章受章に輝く元山正氏（S16年3月卒）の乾杯で宴は始まった。

S12年卒からH5年卒迄の老若男女46名（女性15名）が和気あいあい、時の絆つとも忘れ歎談し旧交を温めた。恒例の千葉医専校歌は池田名誉教授、千葉大学歌は女性幹事のリードで齊唱し、最後は安田幹事（S16年12月卒）のまことに力強い発声による万才三唱、芳賀幹事（S23年卒）の閉会挨拶で次回を楽しみにお開きとなった。

今迄にない充実した集まりとなつたが、これは若手と女性の出席者が大幅に増えた事で大変喜ばしい現象である。この六年間、皆さんの絶大なご協力に深く感謝すると共に新支部長、新役員に対し一層のご支援をお願いする次第である。（三浦 清）

神奈川支部

神奈川県には同窓の先輩後輩が多数居り、これはなにをして消息を通じあつた。が、弥生町の学び舎での卒業生も多くなったので、前回の会合で薬友会と名称を改めた。

平成5年11月16日夕に、横浜駅西口ホテルコスモ横浜に於いて、大学から山崎幹夫学部長をお招きし、初めての薬友会神奈川県支部の総会・懇親会を開催、と呼び掛けたところ、男子58名、女子6名の参加者を得たので報告する。

牧野拓雄氏（昭和39年卒・帝国臓器製薬部長）の司会で進み、永利裕生会長（昭19年卒神奈川県薬剤師会会長）の挨拶、学部長の挨拶と続き、この秋の叙勲の栄に輝いた高木皓次氏（昭17年卒・日本薬剤師会理事）及び茂木武男氏（昭19年卒・千葉大学薬友会副会長）の両氏へ皆でお祝いをした。

永利会長より会長交代の議が出され、村瀬一郎氏（昭38年卒・神奈川県薬務課長）を推された。満場の拍手をもって新しい会長の抱負を聞いた。

宴に移り、長老・石丸正美氏（昭15年卒）の乾杯の音頭で、皆、和気藹々のうちに懇親会が盛り上がった。途中、薬友会理事会の報告や東京支部の状況を、当会の会員でもある三浦清・東京支部長から、お話しして頂くなどして、盛会であった。北野隆司氏（昭28年卒・神奈川県薬剤師会常務理事）の閉会の挨拶で再会を約して散会した。



“あの道、この道”…… 会員だより



石井 智氏 (昭和33年卒)

昭和33年、一度は製薬会社に就職したものの、根っからのスポーツ好きの私はその夏のテレビのナイター放送を見ながら、ふとスポーツアナウンサーにでもなろうかなとイタズラ心を起こしてしまった。そして当時のラジオ東京に応募、どういう訳か合格してしまったのです。スポーツアナはまず全員が野球に取り組み、その他に2、3の専門種目を選ぶのだが、私が選んだのは兄の手ほどきで始めたばかりのゴルフと、高校時代に選手だった陸上競技、どちらも当時は大変マイナーなスポーツでした。現在ゴルフがこんなにも盛んになり、マラソンや駅伝がこれ程のブームになろうとは！私たちはとても運が強かったのだろうと思います。どんな仕事でもそうだろうが、アナウンサーはまず先輩をまねることから始まり、だんだんと自分のスタイルを作っていくのだが、その点ゴルフは参りました。まねようにもまねるもののがなかった。ゴルフの中継などなかったからです。ディレクターもアナウンサーも若く、手探りしながら番組を作って行ったものでした。今でも時々聞かれるのが、ゴルフでは何故ショットはヤードでバットはメートルなのか？ 実はこれは30年前に私が使い始めたのです。ゴルフは欧米ではすべてヤードとフィート。ヤードはメートルに近いからまだ良いが、フィートは全く日本人の感覚にはビンと来ない。それでグリーン上はメートルで行こうと決めました。

いろいろなことがありました定年まであと一年半、現役のままその日を迎えるのを誇りに思っています。



「町の薬局から」

大石 淳一氏 (昭和41年卒・45年修士了)

コンクリートの部屋の中に有機溶媒の立ち込める放医研の実験室から、薬の目的地「人」との一接点、町の薬局に移ってはや12年。一般薬品の他に最近では近隣の医師・歯科医師の理解もあって少しですが処方箋による医療用薬品もやるようになってきました。医師と違って開局薬剤師が薬の作用を観察することは滅多にありません。その点、自分が係わった薬の使用者から生の話が聞けて、能書き通りとは言っても活字で読むだけとは全く違う勉強を毎日させてもらっております。

行政の医療見直しは、急ピッチで進み医薬分業への今の追い風がこれからどうやって行くのかは解りません。しかし、薬と人との交差点は頻繁で複雑になり、その交通整理に適切さと迅速さが益々要求されることは確実です。

現場の薬剤師の努力はもちろんですが、膨大で質の異なる情報の渦に恐ろしくなります。薬学の中にこれを整理・評価・体系付けるシステムを組み入れて、質の高い技術の開発を希望しております。

「卒業したのはまだ最近」の気分でおりましたがこの2年間に3回もメガネを換え、また昨年より娘が幸運にも同じ薬学部に入学出来、自分自身の独立の頃を思い出し、時間の経過を実感しております。父、進一（S10年卒業）は帳簿を、店頭は私と妻眞貴子（S46年卒）とで仕事を分けております。私のところは、東名IC（吉田、牧の原）から10数分の静かな田舎町です。ついでの節にはお立ち寄り下さい。



「満点の星空を思いつつ…」

十八公 宏衣氏 (昭和51年卒)

国連ボランティアとして働いた南太平洋の小国ツバルから帰国してちょうど3年になります。現在は主に途上国への医療協力をするNGOの事務局に勤務しています。この原稿を依頼され、大学を卒業して18年経ったことを思い出し、改めてその長さに驚いています。

アフリカのマラウイとツバルを合わせ、4年間を途上国で生活しました。特に不安も持たず出掛け、それなりに適応し、様々な人々に山合う楽しい生活でしたが、何と言っても、未知の文化に触れられた事と、自分が強く必要とされている実感が不自由で単調な毎日の生活に張りを持たせ、この4年間を楽しく充実した時にしてくれたのだと思います。

帰国後も引き続き途上国への協力に関する仕事をしたいと思い現在の仕事に就き、チュルノブイリ原発事故被災者への医療協力を担当する部署に居ます。これまでしてきた現地での実務とは異なる事務職ですが仕事を始めて以来2回現地を訪問する機会がありました。旧ソ連は勿論途上国ではありませんが、訪問した地方都市は限りなく途上国に近い状態でした。しかし、モスクワのレストランで会った一介の弾き語り歌手は建物が震える程の声量の素晴らしい美しい声の持ち主で、一体どこの有名なオペラ歌手かと思った程でした。生活環境からは想像も出来ない程の芸術レベルの高さに、改めてこの国の偉大きさに驚かされました。

こんな風に、多くの興味と楽しみと生活の張りを与えてくれた途上国への協力活動ですが、これからはそのお返しが出来るような仕事をして行きたいと思っています。



"第2の人生は薬学で"

久光 正文氏 (平成5年度3年生)

43歳で千葉大薬学部に入ってから丸3年が経ちました。現在生薬学研究室にあります。入学当初は、サークル勧誘の学生達に「御父兄の方ですか」と何回となく聞かれました。いちいち説明するのが面倒なので「息子がお世話になりますので宜しく」と答えておきました。又、改札口で学生定期を見せると、駅員は一瞬とまどった様子をするのですが、年齢を見て「ごくろう様です」とと言われたこともあります。最初のうちはクラス中が若い人達なので、何となく居心地が悪かったのを覚えています。若い人達と付き合っていると気持ちも若くなり、やる気もでてくるようです。

私は20代のときは、低血圧(40~90)で疲れやすかったのですが、漢方薬を飲み始めてからは(70~120)と正常になり、飲み続けているうちに体力もついてきました。それからは漢方に興味を覚え、専門書を読み漁り、実際に漢方医に教えてもらいながら、薬の使い方を覚えていきました。

16歳年下の家内とは6年前に結婚しました。家内は当時体が弱かったので、漢方薬を飲ませたところ次第に体力もつき見違えるほどになりました。この時も漢方薬の威力を実感しました。そこで家内の勧めもあって、大学で薬学を学び薬剤師の資格を取り、残る半生を漢方薬の研究に打ち込もうと決意致しました。

大学では諸先生方の名講義を聴くことができ、とても幸福に思っています。しかし記憶力の悪い私にはテストの時は死ぬ想いです。

仕事(自営業)と勉強を両立させるのに少々苦労していますが、充実した日々を送っております。

サークル情報

野球部6年ぶり7回目の優勝!

毎年秋に行われる伝統の四大戦で我が千葉大が6年ぶりに優勝する事が出来ました。今年で32回をむかえる大会は東大主催で検見川の東大グランドで行われました。昨年は徹夜で京都まで行き、その日のうちに2試合こなした事を考えると千葉大にとって有利な条件でした。四大戦の意義は他校との親睦を深める所にありますが仲々勝負となるところがあり、熱くなる場面も多くありました。しかし試合後には友達となり交流を深める人達もみられました。現在の大学の様子、来年の就職や大学院、試合の事など、情報の交換も行われた様です。



試合結果

千葉大 VS 大阪大 7-2 佐藤-江沢

千葉大 VS 京都大 15-5 岩佐、佐藤-谷川

千葉大 VS 東京大 9-1 佐藤-谷川

以下の賞を受賞しました。

MVP・岩佐浩道(2年サード)

最優秀投手賞・佐藤裕二(4年)

ベストナイン賞 三井田宏明(4年セカンド)

戸塚 裕一(4年センター)

富沢 宏之(3年ライト)

たかが4校で行う大会と思われますが、ただの草野球と違った雰囲気がありしばらく優勝から遠ざかっていました。千葉大の今までの傾向は、「本番に力が出せず、いざという時にもろさが出てる」といった所です。(もししかしたら入学試験でそういう人達が集まつたのかもしれない。)しかし今回はエラーも少なくもろさも出ることなく順調に勝つことができました。

教職員の異動(1993.5~1994.4)

○退官

日野 亨教授(薬品合成化学、1994.3.31)

○教授発令

堀江 利治(生物薬剤学、東京薬科大学助教授より、1994.1.1)

中川 昌子(薬品合成化学、学内助教授より、1994.4.1)

玉野井 邑朗(薬効・安全性学講座、教養部教授より、1994.4.1)

大橋 國雄(衛生薬学講座、教養部教授より、1994.4.1)

○助教授発令

斎藤 和季(生薬学、学内講師より、1993.5.16)

○助手発令

仲佐 啓詳(病院薬学、附属病院薬剤部助手より、1993.10.1)

○転出

大森 栄助手(病院薬学、千葉大学附属病院・助教授、副薬剤部長へ、1993.5.16)



山根靖弘先生のご逝去を悼む

千葉大学薬友会顧問、千葉大学名誉教授、山根靖弘先生には平成6年3月3日68歳で永眠されました。先生は、3月1日に大変お元気に千葉市での会議に出席された帰路、クモ膜下出血でたおれられ、意識不明のまま余りにも急にご逝去になられてしまい、まことに痛惜の念にたえません。

山根先生は、昭和23年東京帝國大学医学部薬学科をご卒業、薬品分析化学教室にて石館守三教授の薫陶を受けられつつ教育・研究に従事しておられましたが、昭和32年に千葉大学薬学部に薬品分析化学教室の助教授として赴任され、昭和37年に衛生化学の教授となられ、平成3年に千葉大学を停年退官されました。

この間、先生は薬学部長を2度にわたり計4年間、千葉大学評議員を7期14年間、千葉大学附属図書館長を2期4年間併任されるなど、薬学部のみならず大学全体の発展にも挺身尽瘁され、特に大学院薬学研究科博士課程の設立、自然科学系総合大学院博士課程の設立をはじめとする多くの事業の達成に貢献されました。

他方、先生は「金属の環境汚染とその生体への影響」、「金属と癌との関連」を中心として、薬学のみならず医学、理工学等の方々とも多くの共同研究をされつつ、多大なる成果をあげられました。

先生は、昭和61年に日本薬学会副会頭ならびに日本薬学会第106年会組織委員長として、8千名を越す参加者を千葉市に迎えて大きな成功をおさめられました。なお、山根先生にはこの度日本薬学会会頭より有功会員の推薦状が届けられました。

平成元年に千葉大学薬学部創立百周年記念事業が、記念事業会長の山根先生と記念事業後援会会長の岩城謙太郎同窓会長を中心に総力を結集して見事に達成されました事は、私共にとりまして忘れ得ぬ思い出であります。

山根先生はまことに愛情深い温かい方であり、どんな人のどんな話でもお時間の許す限りじっくりと聞いて下さり、そして、大変適切なお答えや指針を与えて下さいました。私も永年にわたり山根先生に大変お世話になりましたが、指導いただいた事が走馬灯の様に思い出されます。

山根靖弘先生の輝かしいご功績を讃え、ご指導を感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

千葉大学薬学部教授 廣瀬 聖雄

変わる大学



平成6年度からの薬学部新カリキュラム

教務委員長（平成5年度） 山本 恵司

平成3年7月に文部省は「大学設置基準」を大改正しました。40年間近く守られてきた一般教育（教養）と専門教育の区分、一般教育の必修・必置制が大幅に緩和・弾力化され、それぞれの大学が自由に4年間の教育内容を編成できるようになりました。「医療の担い手」である高度な知識・技術をもつ薬剤師の教育、創薬研究者養成の一層の充実化は千葉大学薬学部の大きな目標とするところです。2年以上に亘る全学的な検討を経て、平成6年度入学から新たなシステム・組織をもって薬学部での教育がスタートすることになりました。以下にその概要をお知らせします。

教養部の廃止 1、2年生は教養部、3、4年生は薬学部という従来のシステムは無くなり、入学時から薬学部が責任をもって学生の一貫教育にあたることになります。130人の教養部所属教官は各学部に配置換えとなり、薬学部には玉野井教授（生物学）、大橋教授（化学）が加わって戴くことになりました。今までの教養科目（48単位）は概ね、普遍教育科目（26単位）と変り4年の卒業時までの間での履修が可能となります。パンキヨー（般教）とかモラトリアムとか言われ、大学教育の中でも硬直化した部分の改善が行われるものと期待されます。

アーリーエクスポートジャー 薬学部に入ってきたのに仲々専門教育が始まらず、学生は新鮮な勉学意欲、方向性を見失いがちだったとの反省から専門教育を早い時期から始め、合わせて3、4年次の過密を解消することとしました。因に、これまで1年生は週2コマのみの専門科目でしたが、一挙に週7コマに増やされ、薬学概論の講義も復活しました。新カリキュラムでは2年生はほぼ毎日専門科目の講義が行われ、3年生の午前中の講義は全て選択科目となります。土曜休日化の影響等で60分間、午前中3コマの講義が多くなっていましたが、90分午前中2コマへと戻ることと合わせて、ゆとりをもったカリキュラムにより2、3年次での専門科目への理解度が増すものと考えられます。なお一般実習は3年生午後の時間帯と変わりませんが、新カリキュラムの検討段階で施設・設備が許せば2年生後期から実施することの必要性が真剣に話し合われており、今後の課題となっています。4年生では特別実習の他に医療薬学、新薬論、医薬品情報論等の新科目が設定され、平成10年度にはこうした科目が開講される予定です。

今後の課題 教養部廃止により、一般教育にあたる科目を担当するのは全学教官ということになり、薬学部教官も他学部学生に化学・生物・健康科学等の講義が義務づけられることになりました。多忙を極める先生方の悲鳴が聞こえそうです。さらに国家試験内容の変更、薬学6年制構想への対応もあります。学部卒業の資格とその後の教育期間中ににおける6ヶ月以上の実務実習の案も取りざたされていることを考えると、今回の大学改革は改革の「始まりの始まり」との感がしています。

薬友会より

平成6年～平成7年 主な活動予定

- 6年4月 会報4号発行
6月 役員会・総会・生涯教育セミナー
(次頁参照)
11月 役員会・常任委員会
- 7年4月 会報5号発行
6月 生涯教育セミナー
10月 会員名簿発行(4年に1回)
11月 役員会・常任委員会

平成5年 活動報告

- 3月 新入生入会案内(終身会員99名入会)
5月 会報3号発行(4100部)
6月 第2回生涯教育セミナー(野口記念館)
主題「医薬品情報の創出と伝達」
(講師5名、参加者72名)
- 10月 近畿支部総会
神奈川支部総会
いのはな会設立総会
- 11月 東京支部総会(出席75名)
役員会・常任委員会(出席44名)

資金協力のお願い

本会の活動を益々盛んにするために、会員の皆様に終身会員へのご加入とご寄付をお願いしております。

1) 終身会員。会費2万円。昭和48年に開設。(現在50%加入)会員名簿を無料で配布します。

2) 寄付(1口2千円から)。終身会費が1万円であった皆様、ご協力をお願いします。

3) 会報、名簿への広告掲載にもご協力下さい。

申し込みは、同封の郵便振込用紙をご利用下さい。

会員名簿(平成3年版) — 頒布のご案内
一部 5000円

終身会員の方へは既に発送しております。
終身会員以外の方は名簿係へお申込み下さい。

会員名簿第一次期改訂のご案内

名簿委員会では、平成7年度版の新名簿発行(平成7年秋予定)に向けて準備を進めております。今後総会通知の出欠ハガキにて、会員の皆様全員の住所等の確認をさせて頂きたく、総会への出欠の有無に関わらず、出欠ハガキを必ずご返送下さい。この際、氏名の「ふりがな」を正しくお知らせ下さい。「ふりがな」が間違っていますと、索引作成はコンピュータで行うため、正しい位置に御名前が出てきません。お手元にある名簿で確認して下さい。なお、これ以降に住所変更等があった場合は、連絡カード(現名簿に縫じ込み)又はFAXにて速やかにご連絡下さい。

薬友会宛送金のご案内

郵便振替: 東京5-551796「千葉大学薬友会」
銀行振込: 千葉銀行西千葉支店、普通預金口座
2232357「千葉大学薬友会」

できるだけ郵便振替をお願いします。銀行振込の場合には同時にがき又はFAX(043-255-1574)で送金内容をお知らせ下さい。

各種委員会役員名簿

総務委員会	○今成登志男、笈川節子、関根利一 村上泰興(S36)、立崎隆(S41)、 野中浦雄(S42)、坂井和男(アドバイザー)
財務委員会	○笈川節子、今成登志男、関根利一 村上泰興、立崎隆、野中浦雄、藤沢栄一(S13:アドバイザー)、上野光一(アドバイザー)
名簿委員会	○関根利一、今成登志男、笈川節子 村上泰興、立崎隆、野中浦雄、池上文雄(アドバイザー)
事業委員会	○澤井哲夫、石川勉、齊藤和季、坂井和男、成松鎮雄、小口敏夫、大川幸子(S32)、山田和見(S32)、小川通孝(S34)

1993年度 卒業生の進路

会社/進路	学部		修士		計
	男	女	男	女	
進学者(千葉大学大学院)	19	16	4	1	40
(他大学大学院)	2	1	0	0	3
帝国臓器製薬	0	2	1	1	4
エーザイ	0	1	1	1	3
協和醸酵工業	0	1	1	1	3
研修生	0	3	0	0	3
第一製薬	0	0	3	0	3
大正製薬	0	0	2	1	3
鳥居薬品	0	0	3	0	3

会社/進路	学部		修士		計
	男	女	男	女	
三菱化成	0	2	1	0	3
持田製薬	0	3	0	0	3
岩城製薬	0	2	0	0	2
三共	0	0	2	0	2
参天製薬	0	0	2	0	2
サントリー	0	2	0	0	2
富山化学工業	0	0	2	0	2
萬有製薬	0	1	1	0	2
富士レビオ	0	1	0	1	2

★1名就職先

学 部: カイノス、加藤病院、環境管理センター、キリンビール、杏林製薬、埼玉第一製薬、相模中央研究所、残留農薬研究所、ジーシー、筑波大学附属病院、津田沼病院、東京田辺製薬、東邦大学佐倉病院、日本調剤、日本メジフィックス、薬局(自営)

修 士: 味の素、大塚製薬、小野薬品工業、杏林大学病院、資生堂、通商産業省、ソムラ、帝京大学薬学部、テルモ、東レ、野田醤油、北陸製薬、星葉科大学、三井製薬、メルク萬有製薬、山之内製薬、横浜市職員

博 士: 国立衛生試験所、佐々木研究所、理化学研究所

第3回千葉大学薬友会生涯教育セミナー（宮木高明記念セミナー）開催のお知らせ

第3回生涯教育セミナーを下記のよう開催致します。今回は地元千葉で行いますので、本学部卒業生の他、千葉県内の薬剤師の方々も参加の予定です。関心のある非会員の方もお誘い合わせの上、奮ってご参加下さい。

1) メインテーマ『薬の適正使用、それぞれの立場から』

医療の現場での「薬」の適正使用について、当然のことながら薬剤師は最も重い責任を負っています。昨年度の生涯教育セミナーでは、医療情報の面からこの問題を取り上げました。今回は「薬の適正使用」の問題点について開業薬局、漢方医学、病院臨床医、基礎研究者などの様々な立場からの講師にご講演をお願いしております。なお、本学部の発展にご功績のあった故宮木高明教授の大元からの基金の援助を受け、本セミナーに「宮木高明記念セミナー」の副題を付けました。本年度セミナーは薬友会総会に引き続き開催されます。

2) 演題と講師

- ・薬友会会长挨拶 山崎幹夫（千葉大学薬学部長）
- ・はじめに 澤井哲夫（千葉大学薬学部教授）
- 1. 街の薬局からは地域がみえる生活がみえる
小林純一（長野県薬剤師会、薬局経営）
- 2. 漢方薬の基礎と使い方
鳥居塚和生（北里大学東洋医学総合研究所室長）
- 3. 消化器病における薬の使い方…その問題点について…
大藤正雄（千葉大学医学部教授）
- 4. 宮木高明記念講演 病態と酵素-インヒビターとともに…
青柳高明（昭和薬科大学教授）

3) 日 時：平成6年6月18日（土）午後1時～5時
引続き、5時30分よりミキサー（懇親会）を行います。

4) 場 所：千葉大学大学院自然科学研究科大会議室
千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学西千葉キャンパス内

（JR西千葉駅北口より南門経由で徒歩7分、京成みどり台駅より正門経由で徒歩10分）

5) 参加予約の方法：同封の振込用紙に、参加者氏名、住所、卒業年次、職業をご記入の上、下記の郵便振替口座に、参加費をお振り込み下さい。

東京5-551796 千葉大学薬友会
参加予約締切： 平成6年6月10日（金）

6) 参加費：2000円（予約時）
2500円（当日・非会員）

7) ミキサー参加費：
2500円（予約時）
3000円（当日・非会員）

8) 連絡先：
〒263 千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学薬友会事業委員会（担当 成松鎮雄）
TEL 043-290-2936 FAX 043-255-1574



千葉大学薬友会総会のお知らせ

日 時：平成6年6月18日（土）
午後12時30分～13時

場 所：千葉大学薬学部第2講義室

議 題：1. 事業報告 2. 会計報告 3. 役員改選 4. 事業計画 5. その他

懇親会は同日開催の生涯教育セミナーのミキサーと合同です。セミナーの方にお申し込み下さい。

編集後記

御陰様で第4号が発行される運びとなりました。本号より会報委員が大幅に交代致しましたので、少し紙面の装いもかわりました。今回は女性の立場から女性の社会進出について論じていただきました。就職難の折ですので何かの役に立てば幸いです。また、戦後初と言っても良い大学教育の見直しで大学教育が如何に変わるかを、教務委員長の山本教授に解説していただきました。御意見、御要望をお待ちしております。

会報委員

五十嵐一衛（委員長）、成松鎮雄、鳥澤保廣、柏木敬子、細川正清、加藤文男（S47）、角田範子（S52）、稻垣陽子（修1）、佐藤裕二（修1）